

短期大学における課外活動研究
—有意義なキャンパスライフのために—

北濱幹士
東海大学福岡短期大学

(受付：2006年9月20日)

(受理：2006年12月13日)

A study of club activities in Junior College
~ Promoting Quality of Campus Life ~

BY

Kanji Kitahama

Abstract

Although generally a number of university or junior college students avoid joining club activities because of lack of motivation, the club activities in Tokai University Fukuoka Junior College are different from other colleges. However, the junior college students need to be helped as much as possible by staff and faculty in order to manage club activities. Various kinds of assistance helps the students improve in all aspects of junior college life, including studies and private life.

This report demonstrates the ways in which Tokai University Fukuoka Junior College has handled the club activities within the past two years. The search for a new style of club activities, such as how the students' motivation maintains the club activities and promotes the quality of campus life, will also be discussed. Through club activities and the introduction of Intramural Sports, it is hoped that the attitudes of reluctant students will improve.

Key words: club activities, junior college, quality of campus life, Intramural Sports,
recreational sports

1. はじめに

平成16年度九州地区大学体育協議会体育系学生リーダーズ・トレーニング報告書¹⁾によると、大学・短期大学に属するクラブ・サークル数、及び、クラブ・サークルへの参加学生数が近年急激に減ってきている。このことは、経済的な問題からアルバイトに従事する必要に迫られ、クラブ・サークル活動を行う時間的余裕がないということのほか、クラブ・サークル活動への関心が薄れてきていることなどが理由として挙げられている。特に体育会系クラブ・サークルはクラブ存続のための学生確保ですら難しいとされている。しかしながら、東海大学福岡短期大学においてクラブ活動に携わる学生数は他大学・他短期大学とは異なり、2004年・2005年度と増加しているのが現状である。これは東海大学福岡短期大学におけるクラブ・サークル活動が競技スポーツとしてのクラブ・サークル活動だけでなく、レクリエーションスポーツとしてのクラブ・サークル活動を受け入れてきたからと考えられる。

2. レクリエーションスポーツ

1) レクリエーション活動としてのスポーツ

レクリエーションの定義を明確にしておく必要がある。多数の文献で様々な紹介がされているが、「re-create (再創造)」ではなく、ラテン語の「recreare (新しいものを創る)」を強調して考えていきたい。高橋ら²⁾は「個人的であれ、集団的であれ、達成感や満足感があり、かつ社会的にも承認される経験 (主に自由時間で) をうながす働きかけ」(p. 36)、「新しいものを創る」(p. 37)と紹介している。茅野³⁾は「レクリエーション活動とは、プラス感情をもたらす活動」と記している。上記の定義を踏まえ、本研究報告におけるレクリエーション定義を「個々、或いは集団が (で) 楽しみ・楽しむために行う行動」とする。

2) 「To have (持つこと)」「To be (あること)」

1960年代より西欧各国で展開された、スポーツ・フォア・オール。公認スポーツ指導者養成テキスト内⁴⁾では「より広いスポーツの国際的な定義を求められるようになり、1975年ヨーロッパ・スポーツ担当大臣会議にてヨーロッパ・みんなのスポーツ憲章を採択し、スポーツを楽しみや健康を求めて、自発的に行われる運動と定義した」と記載している (p. 33)。木村⁵⁾は、「スポーツをすべての人のためのものとするスポーツ・フォア・オール」と著書している (p. 159)。

東海大学福岡短期大学は「身体運動のスポーツ」だけでなく、「気分転換としてのスポーツ」、そして様々な場において、更なる飛躍の場としての「クラブ・サークル・フォア・オール」を実践している。レクリエーションインストラクター養成テキスト⁶⁾で記されている「To have (持つこと)」「To be (あること)」を例に挙げると、「それらの言葉を換えれば、精神的・文化的な価値を改めて評価することである。持つことによって幸福になるのではなく、必要最小限のモノを確保したあとは、それを利用してどんな文化を育てていくかということこそが問われるのである」(p.9)。短期大学生は小学校、中学校、高等学校での授業及び課外活動において、或る程度の「To have」があり、どのようにその「To have」と付き合っていけばよいのかが (To have から To be) 不明なのではないだろうか。上記した「To have (持つこと)」「To be (あること)」はスポーツ (身体運動) に留まる事柄では無い。従って、文科系クラブ・サークルにおいても同様の事が言えるであろう。学生個々が以前より培ってきたもの、興味を持ち学び始めたもの (To have) を利用しどのような文化 (新しい形) にしていく

か (To be) が重要であり、「To be」を支えるシステム、援助が必要になってくる。

3. 4年制大学と短期大学の違い

全面的に理解しておかなければならない「4年制大学と短期大学の違い」がある。いくつかの異なる点が挙げられるが一番大きな要因は「時間」である。4年制であれば4年間、短期大学では2年間が通常の学内在籍期間である。4年制大学でのクラブ・サークル活動の場合、1年次に雰囲気をつえ、2年次に本格的に参加、3年次に上級生のマネジメントアシスタントを行い、4年次において、数名はクラブ・サークル内の代表のポジションに就き、クラブ・サークル全体をマネジメントする。結論から述べれば、所属クラブ・サークルについての理解時間が4年あり、3年間に渡り上級生より学ぶ事ができる。比べて短期大学では高等学校を卒業し短期大学生生活に慣れてくる半年後、所謂1年次後半より各クラブ・サークルのリーダーとしてマネジメントする立場に就くのである。学生リーダー個々にクラブ・サークル活動に対してのリーダーシップ、モチベーション、マネジメント能力が備わっていなければ活動を現状維持、或いは更なる推進を行う事が難しい。しかし、1年次後期には学生リーダーとして教職員より次年度を多大に期待、頼りにされる立場に就く事にもなる。これにより、学生自身が様々な事柄において成長していく可能性が生まれるのである。上記した事柄が短期大学クラブ・サークル活動における「時間」に対する見解となるのである。

4. 東海大学福岡短期大学の取り組み

東海大学福岡短期大学は全国各地に展開している学校法人東海大学の短期大学である。福岡短期大学だけの単位で見据えた場合、学生数は340名程、専任教職員は30名程の短期大学である(2006年5月現在)、短期大学組織そのものとしては小規模であるが、学校法人東海大学に所属する一短期大学であり、東海大学関連教育機関である大学、短期大学(部)、高等学校、中学校、小学校、幼稚園との交流もある。福岡短期大学校舎は付属第五高校、付属自由ヶ丘幼稚園と隣接しており、学校法人東海大学福岡キャンパスと位置づけされている。

東海大学福岡短期大学の試みの一つとして、毎年、次年度が始まる前に「リーダーズ研修会」を次年度2年生に対して実施している。毎年実施方法は変更するが、前年度学友会執行委員会、次年度有志会常任委員会を中心に学生が学生による短期大学内自治を深めるためにもリーダー候補者(各クラブ・サークル部長・役員など)へ、最上級生になるにあたり、更なる意識改革を行っている。「リーダーズ研修会」の結果を示す場として、新学期オリエンテーションウィークに行われる「新入生歓迎オリエンテーションキャンプ」(1泊2日)がある。キャンプ参加学生は約200名、全新生、全教職員、そしてリーダーズ研修会に参加した2年次生である。キャンプ地到着後に行われる「福短オリンピック」(新生がゼミ毎に分かれ、各種レクリエーションスポーツを行う)。各2年次生は企画・運営を行い、新生に対してリーダーシップを執る。夕食後に行われる各企画では(学内行事、学友会・有志会クラブ・サークル紹介など)2年次生代表数名が舞台に、他2年次生は企画を円滑に行うためにゼミ毎に分かれたテーブル入り、新生と共に座り、そして教職員の補助を行う。

学友会(学友会執行委員会、有志会執行委員会、建学祭実行委員会、卒業パーティー実行委員会)の活動は学生主体が原則ではあるが、数名の教職員が計画時より密に関わり、学生指導を行っていることは事実である。しかしながら、教職員が全面的にバックアップする事もあり、事前に企画の軌道

修正、規律維持といった監視者としての役割だけでなく、学友会と共同して年間計画の策定・推進という役割も果たしている事は重要である。これは、リーダース研修会の参加という下地が生きた実例であると共に、教職員と学生との相互理解と信頼醸成が更に進む一因ともなっている。上記した学生との円滑な教職員の関係は課外活動上の事だけではなく、学習態度等においても良い傾向が見出せている。

以下に紹介する2つの実例は（バスケットボール部、テコンドー部）年間を通じて、或いは学内における課外活動の方向性を見出せるものである。

1) バスケットボール部においての実例

東海大学福岡短期大学2005年度バスケットボール部の例を紹介する。キャプテンとなった学生は唯一の2年生部員H君であり、勿論H君がキャプテン（部長）となった。1年次にはH君の同期生が3名在籍していたが、他部活動との掛け持ちであった為、2年次になると同時に2名は退部した。4月に新入生が7名加わりH君にとって短期大学でのラストシーズンが始まった。新入部員全員がバスケット経験者であった事もあり、練習は順調に進んだ。週2回の練習であるが、内容として充実していたように見受けられた。結論としてH君はチームをまとめ上げ、九州地区大学体育大会予選1回戦で4年制大学を相手に、東海大学福岡短期大学男子バスケットボール部創立16年目にしての初勝利を掴んだ。

九州地区大学体育大会後は学校法人東海大学短期大学（部）と短期大学（計4短期大学（部））が一同にして行われる、東海大学短期大学（部）スポーツ大会の準備となり男子バスケットボール部だけでなく、出場者全員をまとめ上げ、総合優勝を勝ち取った。

11月に行われた建学祭では「ショー・バスケットボール（Show Basketball）」を披露し、バスケットボールを体育館内だけのものではなく、違った形、新しい可能性を持つバスケットボールの素晴らしさを他学生及び教職員に対して立派に示した。

この「ショー・バスケットボール」の素晴らしさに目覚めたバスケットボール部1年次生が中心となり次年度に行われた新入生オリエンテーションキャンプ、第20回東海大学短期大学（部）スポーツ大会懇親会、第17回建学祭、近隣の幼稚園などでもショー・バスケットを披露し続けている。

2) テコンドー部においての実例

次に東海大学福岡短期大学2005年度テコンドー部（前年度サークル扱い）の例を紹介する。A君は入学当初よりテコンドー部設立の為に部員を集め、新規団体設立の為に書類を作成しテコンドーサークルを立ち上げた。初年度は学内において練習場所の確保から始めなければならなかったが、1年次生でありながら、練習、発表の場（試合）、そして部員の面倒を見ていかなければならない。一人で全部員にテコンドーを教えるわけにもいかず、A君の所属する協会より指導者を招き、練習を行った。

2年次には新入部員も獲得し、テコンドーサークルは活動実績、部員数などを学校に評価され部に昇格、廃部を免れることができた。一人の学生の趣味でしかなかったテコンドーが福岡短期大学において部設立となり、短期大学に一つの礎を築く事ができた。

このように2年間という短期間で部活動を立ち上げる事は可能であるが、その後存続していく事こそが一番難しい事である。

5. 短期大学における課外活動の考察

「課外活動が盛んな学校は楽しい」、このような言葉は世間一般で広く使われている。課外活動が盛んで楽しい学校になる為には、1) 学生の力だけで十分であり大学（教職員）による課外活動援助は不必要、2) 大学（教職員）は可能な限り学生課外活動援助を行うべき、と教職員の課外活動への取り組みが一つの疑問として生じる。体育学部などを要する有名4年制大学では大学の名称を掲げて競技スポーツを行う場合、大学としてクラブへの関わりは資金的・場所的援助などを含め非常に深い。競技スポーツクラブに属さないその他の学生はサークル団体体系を取り、自分の楽しみの範囲で活動するのが多い事と見受けられる。しかしながら、東海大学福岡短期大学における全てのクラブ・サークル活動は短期大学公認団体（部）とされるため、「サークル団体」範囲での活動状況でありながらも、短期大学名称を使用し、各種公式大会に参加する事が可能である。従って、競技スポーツに秀でている学生が入学してくる大学・短期大学とは根本的にクラブ・サークル活動のあり方自体が異なっているのである。

東海大学福岡短期大学の課外活動（クラブ活動）とはあくまでも4年制大学で呼ばれるサークルレベルのものであり、その物事が好きな学生が集まり、好きな活動を行っているにすぎない。監督、コーチ、マネージャー、トレーナーは居らず、最悪の場合、チームとして試合に参加する人数が揃わない「クラブ」もある（例：男子バレー部員数5名）。上記した大学（教職員）による課外活動援助の疑問点が再浮上する事となる。多くの学生が様々な活動に参加できる状態を大学側が作らなければならないのか、学生側が作らなければならないのかである。学生生活全般において短期大学教職員・学生相互の関係を円滑にしておくべきであることは間違いない。特に短期大学ではクラブ・サークル存続の有無が短期大学の雰囲気の一つを担っている事は否めない。学生のやる気によって、突然の廃部も十二分に有り得る。一生懸命サークルを立ち上げ、クラブに昇格したとしても、後を継ぐ次年度生がいなければクラブ・サークル消滅としかならないのである（上記テコンドー一部の例）。2年間の在学期間でクラブ・サークルを立ち上げる事は容易ではないうえ、活動内容、結果を求められるのは非常に厳しいのである。

短期大学における課外活動とは学生生活の一部分を担っている時間であり、学生である以上学業に勤しみ、学業が第一とされる。そこで大きな問題となるのが、「短期大学として、どのように学生の課外活動へのモチベーションを保ち、学業に良い結果を見出せるような課外活動が行われ、学業・課外活動共に有意義で価値あるキャンパスライフを楽しんで送らせてあげられるのか」である。

課外活動へのモチベーションを保つためとして、先述したように、早いうちに1年次の学生をリーダーとして教職員側も扱う事が挙げられる。上級生が卒業する前にできるだけ新体制（クラブ・サークル新役員）への引き継ぎを終わらせ、次年度の有志会活動を担うのは自分だと言う意識を与える必要がある。これを続けることによって、短期大学への必須提出書類の不備も未然に（学位授与式前に）防ぐことが可能となる。活動時期によっては新体制移行の時期が変わる事もあるが、東海大学福岡短期大学では11月30日が全てのクラブ・サークルに対しての必須提出書類（課外活動報告書、援助費清算書）の締切りとなっている⁷⁾。従って、11月30日までに全てのクラブ・サークルは新体制への変更を終わらなければならないのである。多くの体育会系クラブ・サークルの活動目標（対外試合）は、九州地区大学体育大会、学校法人東海大学が行っている短期大学（部）スポーツ大会であり、

その後11月初旬の建学祭にクラブ・サークル単位で参加したとしても11月末までには十分新体制への変更を行う事ができる。文科系クラブ・サークルにおいても建学祭は学内最大の発表の機会であり、体育会系と同じく11月末の新体制への変更までには十分な日程となる。

短期大学教職員は、課外活動を行っている学生役員に対して自分達一人一人が短期大学の学生リーダーである事をしっかりと認識させ、学生リーダーとして学業にも良い結果を導き出すように指導する事が必要である。学生生活とは課外活動だけではなく、学業あつての課外活動である事、その上で、学生リーダー自身に学生生活における行動、意識の向上を求め、向上が携わらなければ、各課外活動内において同学生・下級生との間が円滑に進まない事も併せて伝えていくべきなのである。

6. 今後の短期大学における課外活動の展望 - Intramural Sports の推進 -

今後クラブ・サークル活動は今まで以上に盛り上がりが無くなっていくと考えられる。このように考えられる要因として2点挙げることができる、1) 競技スポーツ (athletics sports) について2) 学生による学校離れについて、上記の点について考えをまとめる事とする。

第一の要因とした競技スポーツについて高橋ら²⁾は「スポーツ (sports) は、かつて日本においては、どちらかといえば競技スポーツ (athletics) のイメージが強かった」(p. 62)と、スポーツのイメージが競技スポーツより移項されたと述べているが、未だオリンピックやワールドカップなどに見られる競技スポーツの影響は強いのではないだろうか。「メダル・メダル」、「勝利勝利」と叫ぶメディアの言葉に代表されるように勝利至上主義に浸透しているのではないだろうか。スポーツを純粋に楽しみたい学生にも競技スポーツを押し付け、押し付けられてしまっていないだろうか。小学校、中学校、高等学校と競技スポーツの考えが強い中で成長してきた学生は、競技スポーツから離れる事が非常に難しいであろう。個々では自己の競技レベルを理解しているであろうが、やはり「勝利」が全てとなりがちになってしまわないだろうか。インディアカ⁸⁾の教本に記されているに、勝利・記録のみを志向することなく、生活の楽しみとして、スポーツのもつ遊戯性を評価し、スポーツによるコミュニケーションと人間の連帯性を持つ「生涯スポーツ(スポーツ・フォア・オール)」(p. 14)、個々、或いは集団が(で)楽しみ・楽しむために行うレクリエーションナルスポーツの考えが、クラブ・サークル活動へも必要になってくるのではないだろうか。

第二の要因として、学生の学校離れがある。経済的な面を鑑みた場合、多くの学生がアルバイトに精を出しているのが現状である。学生時代のアルバイトは社会人になる前の第一歩として重要とも考えられるが、学生の時間の割り振りが学業とアルバイトだけに費やされている事が多々ある。学内課外活動に参加しない学生にとって、学校とは勉学の為だけであり、自己のレクリエーションは学外に求める傾向が非常に強い。学校とは学業を修める場である事に異論は無いが、年齢差が少ない人間と一緒に課外活動を行える大切な場・時間である事も間違いないはずである。学生である以上、学内施設の利用は容易であり、自己発見の場として学生時代における課外活動を多大に利用すべきではないだろうか。

個々、或いは集団が(で)楽しみ・楽しむために行う学生レクリエーションナルスポーツのため、クラブ・サークル活動発表のため、或いはクラブ・サークルに所属していなくても参加が可能な「Intramural Sports」(学内スポーツ大会)の推進が更に必要となってくるのではないだろうか。Intramuralは「学内で行われる行事」と訳され⁹⁾、Intramural Sports をRecreational Sports(個々、

或いは集団が（で）楽しみ・楽しむために行うスポーツ）と呼ぶ事もある。Intramural Sports参加への順序は大きく分けて4つである、1）参加希望者がチーム（チームスポーツの場合）を作り、2）Intramural Sports Admissionに申し込み、3）キャプテン会議などを経て、4）各試合に臨む事となる。参加資格保有者は大学関係者（学生、教職員）と学内を強調したものである。試合内容は非常に高いものになりうる事もあるが、申し込みの際に参加者は自己のチームレベルを考えビギナーリーグからアドバンスリーグ（例：A, AA, AAA）、或いは女性リーグ（例：Coed）と参加リーグを選択することも可能である。

実際の例としてSouthern Illinois University, Carbondale Intramural Sports Team Roster¹⁰⁾（以後SIUC Intramural Sports Team Roster）を参考とする。SIUC Intramural Sports Team Rosterは参加種目、チーム名、キャプテン名、住所、Eメールアドレス、電話番号、副キャプテン名、出場選手名、及び学籍番号の項目がある。その次は各チームが参加希望のリーグを選択項目となっている、1）性別（Men, Women, Co-Rec）、2）グループ（Fraternity, Sorority, Residence Hall）、3）チームレベル（Division A, Division B）、4）バスケットに限っては身長別（Under 6 ft, Open）。従って、チーム編成は各チームに一任されており、学部チーム、学科チーム、クラスチームなどユニークなチーム作りも可能となるのである。

Intramural SportsのBenefit（ベネフィット：グループでレクリエーションを推進することによって社会にもたらされるよいこと、あるいは役立つ事、楽しいをつくる：レクリエーションインストラクター養成テキスト⁶⁾より抜粋）についてArtingerら¹¹⁾はクラス外活動における学生経験の重要性は文書で証明されている「(The impact of involvement in out-of class activities on a student's collegiate experience has been well documented)」、レクリエーションスポーツが含む多数のベネフィットとして：ストレス解消、自尊心、学業向上、能力向上、社会的融合が挙げられる「(Numerous benefits have also been found to be associated with recreational sports involvement including: stress reduction, self-esteem, enhanced GPA, student development, and ease of social integration)」と論じている（p. 70）。この他、ソーシャルベネフィットのキーワードとして、質ある生活向上「(helping students balance and improve the quality of their lives)」（p. 71）、身体、精神、感情成長の機会提供「(offer the student an opportunity to develop and enhance his or her physical, mental, or emotional capacity)」（p. 71）、社会心理的成長「(influence the psychosocial development of students)」（p. 72）などを紹介している。

「勝利」の為だけではなく、個々、或いは集団が（で）楽しみ・楽しむために或る一定の関係者（学校関係者）が集まり、クラス外における様々な経験、体験、そしてベネフィットを得る事を可能とする Intramural Sports の必要性が日本の大学生、そして在学期間が4年制大学の半分で経験会得の期間が短い短期大学生にとっては更に重要視されるべきではないだろうか。

7. まとめ

スポーツの語源はラテン語のdeportareであり、de（離れる）portare（運ぶ）である。英語のdisport、di/dis（離れる）port（港、運ぶ、仕事する）からsportになり、「仕事から離れて自由になる」という意味から転じて「現実の厳しい仕事から解放されて、大いに遊び、楽しみ、ときには戯れる」となった²⁾（p. 62）。スポーツ本来の意味（大いに遊び、楽しむ）がスポーツスキルレベルの向上を促進し、更なる競技スポーツへ発展に繋がるのではないだろうか。その上で運動能力に秀でた人間が

個々の可能性（才能）を拓げる（高める）事も考えられ、スポーツを様々な形で楽しみたい人間へスポーツの素晴らしさを広めるとならないであろうか。

様々なスポーツ、文科系活動を経験できる場所があり、個々が選り参加、体験、経験し、自己の可能性を最大限拓げる。一つの事柄に留まる必要はなく、個々の可能性を様々な形で伸ばす、これこそが今後考えられるクラブ・サークル活動ではないだろうか。学内在籍年数が比較的短い短期大学のクラブ・サークル活動であれば、教職員の多大な補助が不可欠であり、Intramural Sports の開催は容易ではないだろう。しかしながら、経験を得る機会が少ない短期大学だからこそ、Intramural Sports のベネフィットを最大限利用すべきである。4年制大学であればスポーツを楽しみたい学生に向けて Intramural Sports の組織作り、開催が今後最も学生の大学離れを防ぎ、大学とは学ぶだけの場ではなく、個々の可能性を見つけ、更に拓げる事ができる、場である認識が付くのではないだろうか。

8. 引用・参考文献

- 1) 九州地区大学体育協議会 平成16年度九州地区大学体育協議会 体育系学生リーダーズ・トレーニング報告書
- 2) 高橋 和敏監修 余暇問題研究所編著(1997)「現代人とレジャー・レクリエーション」不味堂出版
- 3) Leisure Exploration Project Network 「ようこそLEEPnetへ」 <http://leepnet.com/>
- 4) 公認スポーツ指導者養成テキスト 財団法人 日本体育協会
- 5) 木村 吉次編著 体育・スポーツ史概論(2001) 有限会社 市村出版
- 6) (財)日本レクリエーション協会編, 2005, 『楽しいをつくる やさしいレクリエーション実践 レクリエーションインストラクター養成テキスト』(財)日本レクリエーション協会発行
- 7) 東海大学福岡短期大学 Campus Guide 2006
- 8) (社)インディアカ協会編集(2003)「インディアカ」(財)レクリエーション協会発行
- 9) 竹林 滋、小島 義郎編者(1990)「ライトハウス英和辞典」<第2版> 株式会社 研究社 発行
- 10) Southern Illinois University, Carbondale Intramural Sports Team Roster (Southern Illinois University, Carbondale Intramural Sports Web Application Form)
http://www.siu.edu/~oirs/intramurals/IMsports_roster.html
- 11) Artinger, L., Clapham, L., Hunt, C., Meigs, M., Milord, N., Sampson, B., & Forrester S.A. (2006), The Social Benefits of Intramural Sports, *NASPA Journal*, Vol.43, no. 1. pp.69-86.